



かわはし

私に生まれてきてくれて ありがとう

米国のバン・クライバーン国際ピアノコンクールで優勝した辻井伸行さんについて書かれた文章を紹介します。

快挙は〈全盲の日本人が優勝〉と伝えられた。ニュース価値はそこにあっても、競演の結果に「全盲の」は要らない。それは奏者の重い個性だけれど、審査上は有利でも不利でもない。勝者が「たまたま」見えない人だったのだ。

録音を何度も聴いて曲を覚えるという。耳で吸収した音は熟成され、天から降ると称される響きで指先に躍り出る。「目が見えた場合」と比べるすべはないが、音色だけ見えているかのような集中は、不利を有利に転じる鍛錬をしのばせる。

師は「驚き以上の感動を伝えるため、彼は勉強を重ねてきた」と言う。全盲ゆえの賛辞は、実力を曇らす「二つのハンディ」だったかもしれない。体ではなく、音の個性が正当に評価された喜びは大きい。

20年前、ご両親は「生まれてよかったです」と思ってくれようか」と悩んだ。やがて、母が台所で口ずさむ歌をおもちゃの鍵盤で再現し、同じ曲でも演奏家を聴き分けてみせた。その才をいち早く見抜いたのは親の愛だ。

かつて息子は「一度だけ目が開くならお母さんの顔が見たい」と口にしたそうだ。母は今、「私に生まれてきてくれてありがとう」と涙する。「できない」ではなく、「できる」ことを見つめ続けたご褒美。世界が「生まれてよかったです」と祝す才能は、どれもそうして開花する。

(6月10日付 朝日新聞 天声人語より)

この新聞記事が出る10日ほど前に、5年生で「人の誕生」をテーマにした学習参観を行いました。どうやって人は生まれてくるのかを学習する子どもたちの様子を見て、10年ほど前に経験したお産の大変さや、生まれてきたときの喜びなどをなつかしく思い出していたお母さん方多かったです。いろんな人からの祝福を受けて生まれてきた命、いつまでも大切に育てていかなければなりません。

参観後の感想より

○誕生するということは、奇跡に近い本当に神様からの授かりものなんですね。5年生になった子どもたちにもそのことが伝わり、一つしかない大切な重い命だとうことが分かっているのかな?と思いながら見せてもらいました。悲しいこと、つらいことがあっても、奇跡のような誕生を心のすみにおいていてくれたら、自分の誕生の重さを思い、乗り越えられるのではないか。一人一人かけがえのない子どもたち、心に忘れる事なく強く優しい人として成長してくれることを願っています。

○受精卵から細胞分裂を繰り返してさまざまな組織ができる胎児になっていく過程は、本当に神秘的なことだなあとちょっとびっくり感動しました。そして、10年前のことを思い出しました。私の場合、逆子のため帝王切開でしたが、出産直後はやはり「生まれてくれて本当によかったです!ありがとう」という思いがいっぱいです、涙があふれ出てきましたことを覚えています。出産直後のベッドの上で裸のまま「オギヤー」と泣いている写真は、私にとって感動的な一枚となっています。その子どもも今は5年生となり、親子で足の大きさの比べ合いをしたりしています。笑顔で「お母さんより大きくなったよ」と言ったときはうれしく思ひ、この笑顔と一緒に命も大切にしてほしいと思いました。

○目に見えないほどの小さな受精卵が、子宮の中で、10ヶ月という短期間進化の道をたどり、人間として誕生する不思議さと命の重みを考えてみると、我が子も奇跡の子(命)の一人なんだなあと思いました。

生まれてきてくれてありがとう。

ご意見ご感想をお寄せください。

（複数行用）